



第 1 図 二子山遺跡遠景（中央の高地・北西より）

第 1 章 調 査 の 経 過

I ま え が き

本遺跡（第 1 図）^{註 1}についてはかなり早く故大塚了城氏や坂本経亮氏らが注意され、その後坂本氏による踏査がなされ、多量の石材と石器の散布に注意され、製作址ではあるまいかという疑問を持たれたと聞くがまことに卓見であったといわねばならぬ。

その後昭和39年（1964年）新産都市埋蔵文化財調査の折に、坂本・隈・杉村・上野・井上氏らが同地を訪れ、後述の凹地附近において、採土のために掘り上げられた土の中から30～40箇の石片を採取した。その際にその約半数が打製石斧であることが確認されている。発見状況は土と共に石器は掘り上げられ、土のみは雨に流され石器等が遺存していたものである。ついで昭和40年（1965年）1月遺跡崖面において、打製石斧および剥片が露出しているのを発見し、後述のような簡単な調査をした。この調査には東海農政局の古川博恭技官（当時九州農政局）が参加され、地形・地質の調査を担当された（別項参照）（第1次調査）。さらに同年2月26日—27日中原所在の支石墓発掘調査の際、三島らは数ヶ所の岩石の露頭を確認し、小規模の調査を行なった（第2次調査）。つぎに昭和42年（1967年）3月26日—4月2日まで、坂本・隈・杉村および三島らによる、遺跡の地形測量を実施した（第3次調査）。（三島 格）

註 1 本遺跡には、石器製作址と2基の円墳がある。後者については、『熊本県埋蔵文化財遺跡地名表』熊本県教委1962年によれば、「フタゴ塚古墳、野々島フタゴヅカ」と記載され、『全国遺跡地図、熊本県』文化財保護委員会1966年の高瀬図市№1281が本円墳（別項遺跡の立地参照）であり、製作址はその周辺である。

Ⅱ 第 1 次 調 査 （琵琶田の坂遺跡）

昭和40年（1965年）1月26・27日2月5日に調査したものである。層序確認のために現場に保存した計12点の石器・剥片は保存期間中に抜き取られてしまい、残念ながら遺物は現存しない。この調査は二子山遺跡の調査にとりかかる以前であったので、われわれは表記のごとく琵琶田の坂遺跡と呼んだが、周辺の地形・地質の調査と、二子山の調査の進捗につれて、かなりの広さに亘る二子山遺跡の一部であることがあきらかになり、琵琶田の坂遺跡は今後二子山遺跡の中に包括せしめることにした。うしなわれた石器の石質および形状は後述の石器と全く同一である。

遺跡の立地は二子山丘陵の北側直下を通る道路の南側崖面で、そこには長さ約30mにおよぶ良好な地層序が認められる部分がある。その層序は下位から⑤託麻砂礫層（23000—25000年 B. P.）・④褐色ローム・③黒色ローム・②暗褐色ローム・①表土の順に堆積している。打製石器及び剥片は黒色ローム層からのみ摘出された。他に文化遺物を認めない。なおこの層序は後述の第Ⅰ—Ⅲ試掘地の層序に共通するが、より高位に位置する第Ⅰ—Ⅲの試掘地では、各層の厚さはかなり薄いが基本的には一致している。（三島格）

註3 井上兼利・上野辰男・東光彦・横田浩・掛橋真・古川および三島らが調査した。

第 2 章 第 2 ・ 3 次 調 査

Ⅲ 第 2 次 調 査

調査区域として二子山第2号墳のはば東側にあたる地域を選定した。同地域は雑木林におおわれた緩傾斜地で、金峰山系玄武岩質安山岩の露頭も数箇所認めることができ、その中の1箇所は凹地となっている。

調査地として、凹地の北側（地主九重幸氏）に1箇所（第Ⅰ試掘地）、南側（地主村上逸郎氏）に2箇所（第Ⅱ・Ⅲ試掘地）を設定し、さらに凹地の北側断面を観察した（第Ⅳ調査地）。第2次調査は1日半という制限された日程の上に、ほとんど雨天であり、十分な成果を得ることができなかったが、その概要は下記のごとくである。

第Ⅰ試掘地（第3・4図）

凹地の北側に2×2mを設定、黒色・暗褐色を呈する表層と暗褐色ローム層（第2層）を15—20cmはぐと、黒色ローム（第3層）にまじって、玄武岩質安山岩の碎片・礫片がおびただしくかつ無秩序にあらわれる。以下は黄褐色ローム層（第4層）で、この上位には碎片・礫片を認めるがより下位には礫が多くなる。黒色ローム（第3層）から得た石片が



第 3 図 第 I 試 掘 地 石 片 出 土 状 況



第 4 図 第 I 試 掘 地 石 片 出 土 状 況

ら打製石斧（含未成品）20箇所を得た。他に文化遺物を認めない。

第Ⅱ試掘地（第5・6図）

斜面に同質の岩石の露頭が2箇所見えており、その周辺に2×1mの試掘地を設定。ここでもかなり多量の碎片を得たが、その中から2箇の打製石斧（完成品）を得た。他に文化遺物を認めない。2箇の岩石の露頭はいずれも長径1m余で、地上の露出部分はあまり大きくないが、その中の1箇の表面には、打撃痕の風化した跡とも考えられる痕跡がかなり認められる（第6図）。

第Ⅲ試掘地

第2試掘地よりやや下の斜面に設定。第3層においておびただしい石片が出土した。その状況はあたかも石屋の仕事場のようなものである。他に文化遺物を認めない。

第Ⅳ調査地（第7・8図）

巾2m奥行き5m余高さ2m余の凹地の西側に、長さ3mの巨岩が斜に露出し、北側には2箇の岩塊が崖面に露出している。これらの石質はいずれも上記の玄武岩質安山岩である。北側の岩塊の間には、約3mにわたって有機質土の堆積を認めるので、その断面を略測した。地形の傾斜にそって数枚の層序が認められるが、主として第2層に碎片や剥片が認められ、第3層の上位にくいこんでいるものもある。摘出した石材から3点の打製石斧（含未成品）が得られた。なお第2・3層の傾斜端から、赤色無文の糸切底各1片を得たが、この部分には落こみがあり混入と認められる。

凹地の成因については、明かにすることはできなかったが、地形全体が傾斜しているのに、この地点のみに排水溝を掘ったとも考えられず、境界のためとしても、やはりこの地点に凹地が限定されているので、納得できない。まえがきにのべた凹地とは本地点である。東西両岩にはさまれた凹地は、時間の制約上発掘できなかったが、後日改めて実施したい。（三島格）

Ⅳ 第3次調査（遺跡の立地）

野々島の町役場所在地からちょうど東方約250mのところに小高い山（海拔約85m）が見える。これが二子山である（第1図）。この地の東にはほぼ南北に細長く湾入する沖積低地があり、この低地に突出するような舌状の丘陵端上に立地している。

第2図に示すとおり、この丘陵上には二つの小丘陵が東西に並んで存在しており、その南側の頂上を基点として測量を行なった。頂上から4mと5mの高さ面で間隔が広がっておって、一つのステップを認めることができる。このステップのあたりから上の部分がおそらく古墳の盛土と推定できるもので、二基の円墳が約35mの距離で存在しているのである。ここで高い方の西丘陵を1号墳、東を2号墳と呼ぶことにする。

1号墳の頂上には『形の凹地があり、その北側には凹地に接して盛り上げた土が認めら



第 5 図 第 II 試 掘 地 左は二個の露頭



第 6 図 第 II 試 掘 地 露 頭

れるが、これは明治10年の西南の役に際して壕を掘ったものであり、同様の壕の跡はこの二子山だけでも東側の傾斜面に遺っているのである。しかし1号墳の南傾斜面の凹地は盗掘坑の痕であり、頂上には板石（玄武岩質安山岩）を用いて天神が祀ってある。なお小祠の傍らには打製石斧2本がおかれていた。2号墳は1号墳より約2.20m低く盗掘坑は認められない。2号墳は丘陵上を利用しわずかに盛土を施したもので、おそらく横穴式石室墳ではないかと推測する。

さて、この二子山はほとんど全域が雑木林で見通しが悪く、測量作業にも相当に困難をきわめたほどである。そのため全域の細部については今後も検討を要するものであるが、ここで一応の概略的な観察を述べてみたい。

まず母岩の露頭地点を挙げると2号墳の斜面に集中しており、その最大のものが2号墳の頂上から東方約12mの斜面に存在している。この露頭は長さ約6×3m、深さ約1.6mにわたって掘りこまれており、かなりの量の石材がこの露頭から採掘されたものとみてよからう。その他の露頭は地表に見えるかぎりにおいては小規模であるが、2号墳の北斜面は重要である。というのはこの二子山は全山が石材の破片によって覆われているといっても過言ではないが、とくに濃密に散布しているところが、この2号墳の北斜面に認められるからである。ステッキボーリングで探索した所見では、この斜面に散布する石材は露頭付近では地表下わずかの深さのところに、しかもすき間のない状態で散っており、そこから斜面を下るにつれて深さも深く、散布状態もまばらになっている。これら石材片の包含状況は北側においてはほぼ東西に走る農道（琵琶田の坂という）の崖面に、火山灰土の堆積した地層中に明瞭に認められる。またこの農道には母岩の露出しているところもあり、この付近に豊富な母岩が存在していることを物語るものといえよう（別項第1次調査参照）。

最後に二子山における石材の破片の散布する範囲についてふれると、東西に約200m、南北は北側の農道ををさんで、その北の畑地にまで及び、2号墳頂から約80m、反対の南側では頂上から100mに達する。今後の課題としては二子山における石材片の散布状態をよりの確におさえ、この測量図の中にプロットすることによって、アトリエの所在を究明することが急務であろう。

昭和43年に琵琶田の坂の北側一帯が開田工事のためブルドーザーが入り、農道の北にあった雑木林から多数の遺物が採取されている。井上兼利氏の所見によると二子山系の破片と使用されたとみられる石器の一群が御領式土器などとともに包含されていたようである。共伴土器の量が少ないところから考えると住居址という推定も当たらないであろう。

（限昭志）

註1 第3次調査は、昭和42年3月地形測量を主目的として、坂本・隈・杉村・三島らにより実施された。なお岡崎敬氏（九大助教授・考古学）が来観された。

V 石器の形態

第2次調査（昭和41年2月26日～27日）において第Ⅰ～第Ⅳ調査区から石器の素材となる剥片や石器未成品および石器等が6,000余点採集された。

（結語、表1参照）

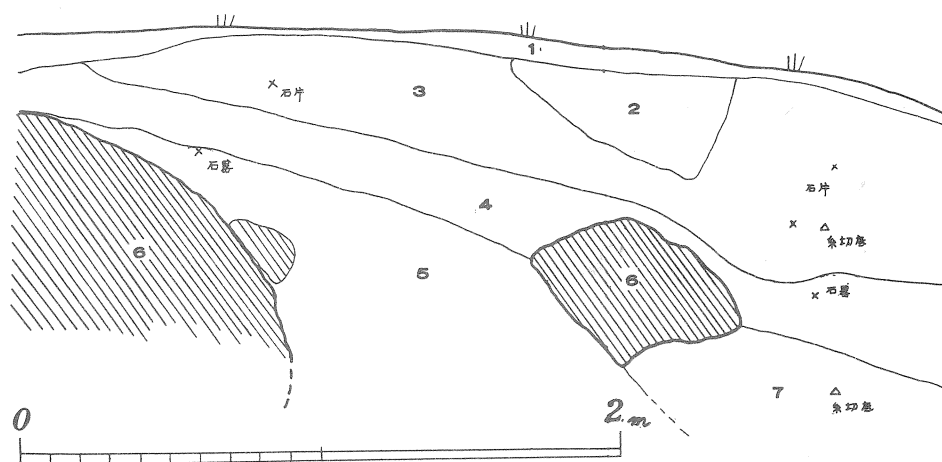
石器製作技術と石器の形態について述べてみよう。

石材の石質はすべて金峯山系玄武岩質安山岩で灰青色を呈し、粒子を含有しもろい。母岩の安山岩の露頭は二子山丘陵に数ヶ所確認された。剥片や石器未成品および石器は露頭を中心^{（第3, 6, 7, 8, 図）}に分布する。このことは石器製作が母岩の付近で行なわれたことを物語るのであろう。剥片、石屑、石器未成品それに完成石器の観察から石器の製作技術を述べてみよう。

縦長の剥片を得るために母岩に対して母岩より硬質の物質で母岩に直角に衝撃が加えられる（第10図参照）。格好の剥片を得るために母岩をあらかじめ加工しておくとか、あるいは母岩から剥がされた石材を加工し石器の素材となる剥片を得やすいように加工しておくというような、一定の技術的システムはなかったようである。さて剥片を素材



第7図 第Ⅳ試掘地 凹地露頭



1. 表層 2. 黄褐色土層 3. 黒色土層 4. 黒褐色土層 5. 黄褐色安山岩風化土層
6. 玄武岩質安山岩 7. 黒色土層

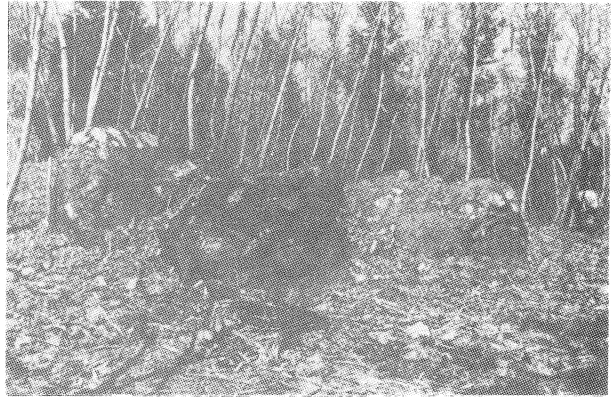
第8図 第Ⅳ試掘地（北側断面）

としてこれに加工する工程であるが、縦長の剥片の側縁はかなり鋭いので、この部分の加工は比較的少なく、基部と先端部に加工がより多く施されている。

加工（打裂）が石器のどの部分に施されているかをみることによって、石器の機能を知ることができ、合せて形態分類が可能である。

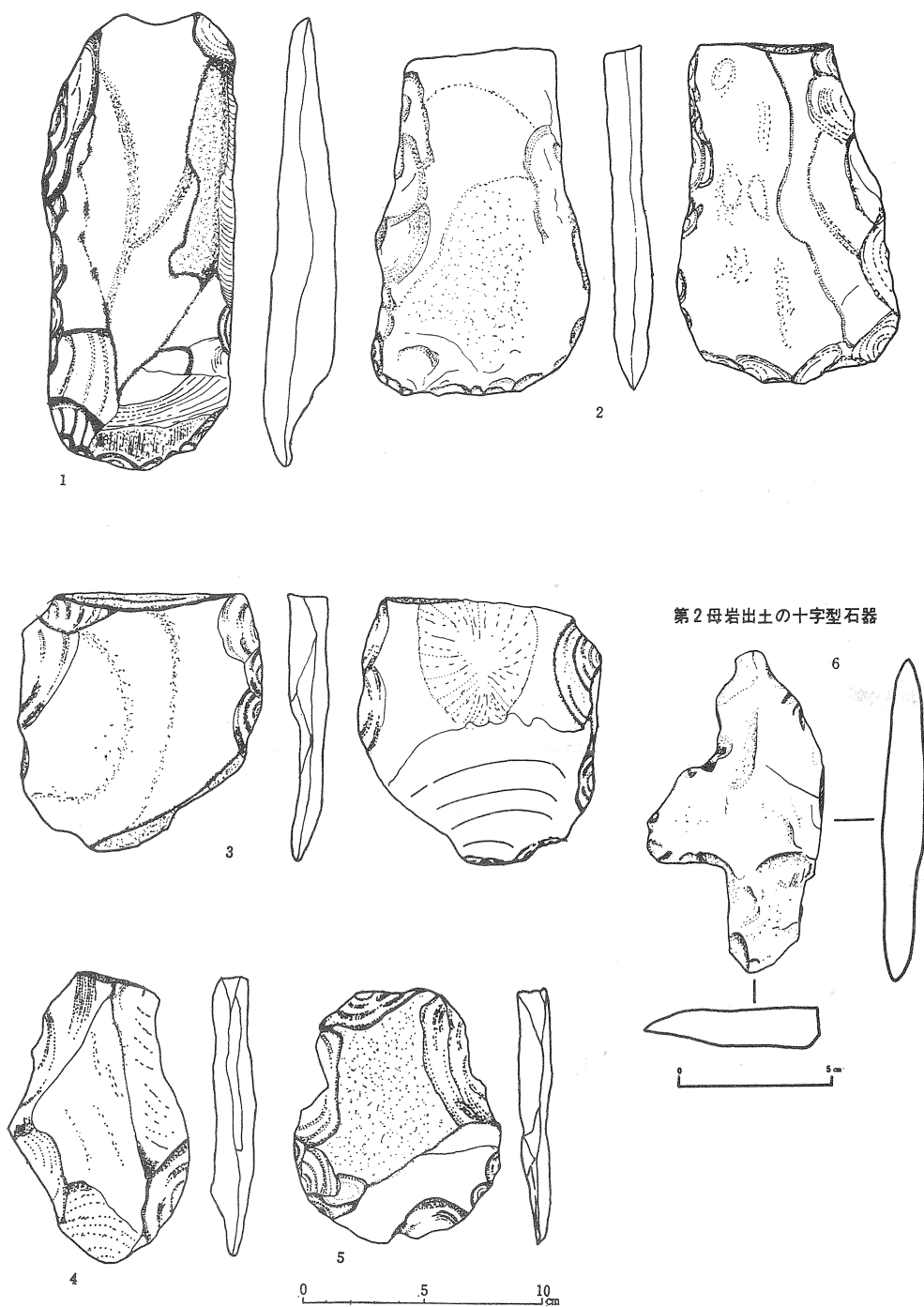
採集された石器は扁平打製石斧であるが形状の上から大きく2つに類型化することができる。Ⅰ群は（第10図1、4）に代表される短冊形石器である。Ⅱ群は（第10図2、3）に代表される基部（頭部）を故意に打ちかいだ石器である。

Ⅰ群に代表される石器は器面の表裏の側縁と先端に打裂が加えられている。また器面の表裏の先端部のみに打裂が認められる。Ⅱ群の石器は一般に器面表裏の先端部に打裂が加えられている。1は全長18.3cmをかぞえる大形の石器。巾7.5cm、厚さ先端部で1cmを計



第9図 二子山露頭転石

る。4は全長11.7cm、厚さ先端部で0.7cmをかぞえる。Ⅰ群は手に持って日用の土工具としての土掻き、土掘りなどの用ははたしえたであろう。Ⅱ群は基部が損失したというより故意に打ちかいたものと考えられる。それはこの種の石器は西合志町の数ヶ所の遺跡から発見されるのである。2は全長14cmをかぞえる大形石器。基部の長さ6.5cm。3は全長10.5cm。基部の長さ8cmを計る。このようにⅡ群には長さ、巾ともに大形化する石器（第18図）が存在することも明らかにされた。Ⅱ群の石器に代表されるものは、柄などを装着した証拠は認められなかったけれども、使用に当ってはおそらく柄などを装着したものと考える。一般に全長10cm以下の短いものが多く、また柄などを装着しないと大形の手で持った場合先端部がかくれてしまう。手で持ったの使用は石器の機能を低下させるのではなかろうか。5は基部の両側縁に簡単な「えぐりこみ」を観察できる。Ⅱ群の石器もⅠ群の石器と同様の機能であろう。使用の痕跡をとどめる刃こぼれがほとんどの石器に認められないことも石器製作址の証左になると考えられる。（杉村彰一）



第10図 石器実測図

VI 結 語

第2次調査において第Ⅰ—第Ⅳ調査区から手許に運ばれた 厩大な石材を整理表示すれば、次表のごとくなる。

得られた総計6018の石材の石質は、別項古川氏報文に記載するごとく、すべて玄武岩質安山岩（金峰山系）で、露頭の石質と一致する。異質の石材はほとんど認められないが、ただ第Ⅳ調査区の凹地内において異質の礫片を微量認めた。

これら石材の分布は、かなり広域の二子山丘陵面全域に亘るものでなく、隈氏報文のごとく露頭を中心に濃厚に分布し、露頭周辺ほど濃密であり離れるに従い粗であるようである。

表1に示した岩塊は大きいものは幼児頭大であるが、厳密には剥片の大なるものと区別がつかないものがある。節理にそって打撃

痕が認められる。最も多量であるのは、剥片として分類したもので全量の約98%に達するが、これには母岩から岩塊を取る時に生じた剥片や、得られた岩塊から石器を製作する際に生ずる剥片（石屑）も含まれるが、重要であるのは、①粗割りして後、次の作業に都合のよい形にする工程と（粗割）、②打裂を加えることにより、全体の形態がより整えられた工程（打裂）を示す石材が、かなり多い点である。未成品にはあきらかに石器であるが、工程中に折損したと考えられるものも含ませた。得られた完成品は9箇で極めて少なく、敲打されておらず打製のままである（第10図、杉村報文参照）。

つぎに、本遺跡の性格について。厩大な石材の中に完成、未完成とともに、①粗割、②打裂（所謂打ち欠き叩打）の順に製作工程を示す石材の存在と、同質の岩石露頭の存在、とくに露頭の中には打撃を加えられたと推定される石面もある（第6図）。以上の諸点と石材分布が露頭周辺により密に認められる点などから、本遺跡の性格を、単なる包蔵あるいは散布地でなく、石器製作址とみなしてよいと考える。ただ土器などの遺物を1片も伴出しなかったので、直接その年代を明かにし得ない。けれども岩質が同一の同形打製石器を、他遺跡で追及することにより、間接的につかみ得る。この作業は併せて二子山製作址との交流圏も傍証し得る（第21図）。最も近距離の遺跡として、二子山から直距離数百米の遺跡では御領式土器に伴うかとされている（隈報文参照）。

調査区	岩 塊	剥 片	完成品	未成品	計
I	36	2164	3	17	2220
II	19	1609	2	0	1630
III	14	2119	4	28	2165
IV				3	3
	69	5892	9	48	6018

表1 調査地区出土石材一覧表

未成品は折損品も含む

つぎに、石器の使用目的について。得られた石器は未使用石器であるので、使用痕は認められないが、両刃、片刃を示す刃部は、とうてい鋭利とは言えずむしろ鈍い。体部も重厚でない。

以上のような特色は、福岡県今山石器製作址^{註1}産出（弥生時代）の玄武岩製大形蛤刃の磨製石斧とは全く異質である。この今山系ともいうべき石斧は、伐木や木材加工にその威力を発揮すると考えるが、二子山産出の打製石斧はそれらの使用には不適當であると考え。熊本市北部の黒色火山灰地帯を踏査しての実感であるが、火山灰地帯なら日用の土工具として土搔き・土掘りなどの用ははたすと考える。

なお一・二附言すると、発掘面積もせまく確言できないが、製作址に土器がないということは、製作地と住居地とが区別されていたのではあるまいかとの疑問をいだかせる。

次に石材供給地について。筆者は数年前『城南町史』^{註2}（熊本県）を執筆した際、縄文時代早・前・中・後期貝塚出土の石器の石質と周辺地域の岩石の鑑定を、今西茂博士（熊本大学理学部）に依頼して、轟・曾畑・阿高・御領貝塚出土の石器のうち、蛇紋岩を除いては、供給地が四貝塚背後や周辺の雁回山・吉野山・宇土半島山地などの比較的近距離の地に求められることを知り、特殊例は別として主として生活圏内にある石材が早期から後期にわたって使用されたと記したが、二子山の場合もおそらくそうではあるまいかと考える。御領貝塚の石器には宇土半島山地産出の安山岩はあっても、金峯山系の玄武岩質安山岩は見られない。（三島格）

註1 中山平次郎「今山の石斧製造所址」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告』6 昭和6年 福岡。

本遺跡は、最近福岡市教委・九州大学考古学研究室により発掘調査され、上限は板付Ⅱ式土器と相伴することが確認された。

『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表』1 福岡市教委 昭和44年 福岡。

註2 『城南町史』三島（分担） 昭和40年 熊本。

第 3 章 第 4 次 調 査 (緊急発掘調査)

I はじめに

今次の調査の目的は 2 つあった。つまり①二子山における石器材料の分布—母岩から剥離した剥片の分布状況—を把握すること、②石器製作址の文化時期の推定であった。①については、II「調査の方法」に述べるとおりである。②についてはさらに 2 つの方法をとった。すなわちまず二子山産の石材で作った石器の出土地(遺跡)を確認して、それらの遺跡の文化時期をつかむことによって、二子山石器製作址の時期を間接的に推定することであった。このことについては「打製石器分布図」(第 21 図 井上兼利編)に示すとおりである。この調査に際しては熊本市立熊本博物館、熊本県立鹿本高等学校、同玉名高等学校、同鹿本商工高等学校、坂本経堯氏資料、菊池市隈府の故川上勇輝氏資料、同高田尚文氏資料、同田中儀信氏資料(菊池市指定文化財)等の遺物を提供していただき、とくに坂本経堯氏・熊本博物館の東光彦氏の御援助をうけた。

つぎには、ピット調査によって、従来の調査でどうしても検出できなかった土器を検出することによって、直接的に文化時期をつかむことであった。その結果は後述のとおりであるが、幸運にも手がかりをつかむことができた。(隈 昭志 井上兼利)

註 5 月 7 日 文化庁の野口義麿技官が踏査され、調査についての多くの助言をえた。

II 調査の方法

前回までの調査により北は琵琶田の坂まで、東は墓地に通じる道路、南は墓地より西にのびる農道、西は杉山(町役場の所有地)までと一応の括りが考えられた。そこで今回は第 2 号墳頂に基点(カー 10)を設定した(第 11 図)。基点を中心として、南北に 10m、東西に 10m 間隔、その交点およそ 120 箇所に試掘坑を入れることにした。各試掘坑の名称は、西より東に 0・1・2・3・4・……・18 と算用数字を用い、北から南に 50 音順にア・イ・ウ・……・スまで用い、各交点を(イ—10)・(サー 6)と試掘坑の名称とした(別図参照)。試掘坑の大きさは一辺 60cm の正方形とし、辺の方向を南北に合せた。

作業は竹やぶの少ない東半分より測量を開始し、設点のすみしだい試掘坑を入れた。

層序確認は 10 列、およびカ列で石片数の少ないところは石片を取りあげ、更に下層まで石器及び石片数の確認を行ない、写真と実測図の作成にあたった。10 列及びカ列以外の試掘坑は石器及び石片が露出したところで写真及び実測図を作成し、全作業終了後に遺物として石器・石片の採取を行なった。各試掘坑は平面図及び断面図と遺物の見通しを入れた。断面図は基点に近い方を入れ作図した。母岩確認のため転石又は母岩と考えられるものの露出調査を行ない、さらに 2 号墳頂南(キ—10)の北側にある転石・(カー 1)付近の転

石・1号墳北側の第2母岩・第2次調査時の第Ⅰ試掘地は第1母岩に近いので母岩に達するまで発掘した。今次調査における第2母岩の発見によって母岩よりの第1次剥離面及び第1次剥片の検出ができ、1号墳付近にも石器製作の工房が考えられるようになった。

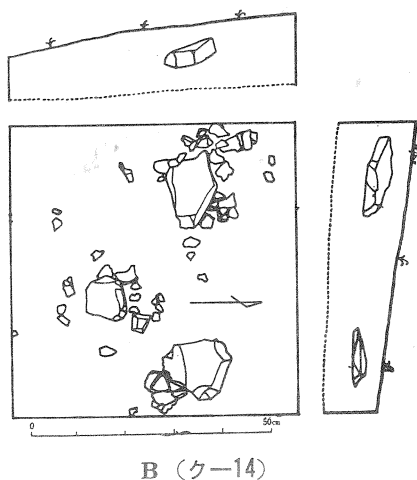
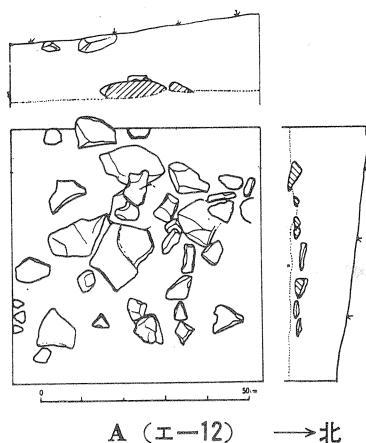
このほかに（キ-7）付近の古墳の盗掘坑らしいものの確認のため試掘坑（第Ⅴ試掘坑）を入れた。また第1号墳に内部主体確認のため二つの試掘坑（第Ⅵ、Ⅶ）を入れ、第Ⅵからは縄文土器、第Ⅶでは家型石棺を確認した。第2号墳も内部主体を知るためピットを入れた。（上野辰男、平岡勝昭）

Ⅲ 石器製作址の範囲 —剥片の分布—

二子山に10mの方眼を設定して、その交点に60cm四方のピットを入れた結果を示すと第11図ようになる。なお今次の調査によって1号墳頂からみて4mと5mの間のステップより高い部分は、古墳築造の際の盛土であることを確認できたので、この部分における石器製作址の状態はすでに古墳時代はかなり破壊されていることになる。しかしながらこの部分では石材の分布がとくに濃厚であることを指摘できる。このことは例え破壊されていても、1号墳上の第Ⅵ試掘坑の状態からすると地表下約210cmまで石材を包含しているので、いかに大量の石材が堆積していたかを物語るものといえる。

第11図における●印は60cm四方のピットで表土を除去した段階での剥片（石器を含む）の数が30点以上のものである。◎印は同じく29～10点であるが、●印とともに表土を除去したままの石材の点数であり、さらに深く掘ればもっと数値が増えることになる。ただし◎印（9～1）はかなり深くまで掘った段階での数値である。したがって●と◎印の部分だけを取り上げたとしても、現在東西120m、南北110mの範囲が少なくとも剥片を濃

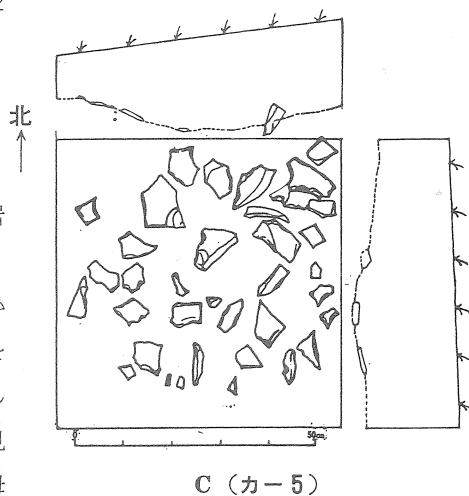
第12図 試掘坑実測図



厚に分布する範囲ということができる（第12図A、B、C）。（限 昭志）

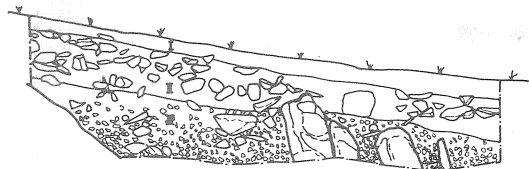
IV 母 岩

前回までの調査では第2号墳の東側に母岩の露頭が存在していることを確認していた。しかし全山に剥片が分布するからにはわずかに1箇所の母岩だけで、これだけ濃密な分布を示すのは不可解であったので、入念に踏査した結果第1号墳の北斜面に新たに母岩を発見しある程度の露出と実測を行なった。この母岩を第2母岩と呼ぶことにする。



C (カ-5)

なお前回までに注目されていた母岩を第1母岩とするが、今次の調査で新たにかなりの拡がりを確認したので、第1母岩群と呼び、その中をさらに分けて、1-Ⅳ（第2次調査時の露頭=第Ⅳ試掘地）、1-Ⅱ（第Ⅱ試掘坑の母岩）、1-Ⅰ（第Ⅰ試掘坑の母岩）、1-2（第2号墳東北斜面の母岩）
1-3（第Ⅰ試掘坑と1-2の間）とすることにした。



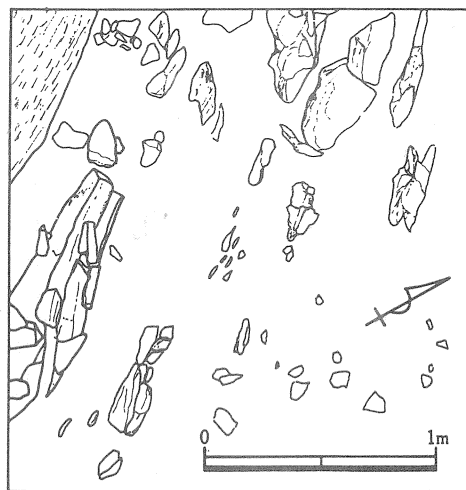
また第2号墳の北斜面に露出していた4個の石材は母岩転石（第9図）であることがわかった。以下主なものについて述べてみよう。



第Ⅰ試掘地

母岩（1-Ⅰ）

＜第13図＞本試掘地は、第2次調査において設定され



第13図 第Ⅰ試掘坑の母岩

たもので、上部の掘開はその時行なわれた（第13図）。したがって、上部についての所見は第2次調査の項を参照されたい。

今次はさらに下部へと掘開し、母岩の存在を確認した。

第Ⅰ試掘地の層序は3層に大別できる。第Ⅰ層は黒褐色を呈する表土である。地表面より5～15cmを測る。第Ⅱ層は黒色ローム層で、15～30cmを測り、西南方が厚く、東および北方に向うにしたがって厚さを減じる。母岩から石材を取る時生じた剥片、および石器の素材としての石片はほとんどすべてがこの第Ⅱ層中に含まれる。第Ⅲ層は褐色ローム層で、多量の風化細礫を含む。礫は母岩が風化剥離したもので不整形、大きさは1～3cm位のものが多い。第Ⅲ層の下部になるにつれて密度を増す。平面図中、白地の部分は、この風化細礫がぎっしりとつまっている状態を表わす。この礫と、第Ⅱ層の石片（剥片）とは明らかに判別できる。さらにこの礫層の下部には、試掘地全面にわたって母岩（岩盤）が存在する。その一部の強硬な部分は風化をうけず、図のように第Ⅲ層中に突出している。これによって、母岩には、北西—東南方向にはしり、西南に約60度の傾斜をもつ節理が観察できる。この節理が、母岩より石片を得る際に非常に有利であることはいうまでもない。

註1 第2次調査においては、Ⅰ—表土、Ⅱ—暗褐色ローム、Ⅲ—黒色ローム、Ⅳ—褐色ロームに区分されているが、今次はⅠ・Ⅱを第Ⅰ層、Ⅲを第Ⅱ層、Ⅳを第Ⅲ層として3層に区分した。

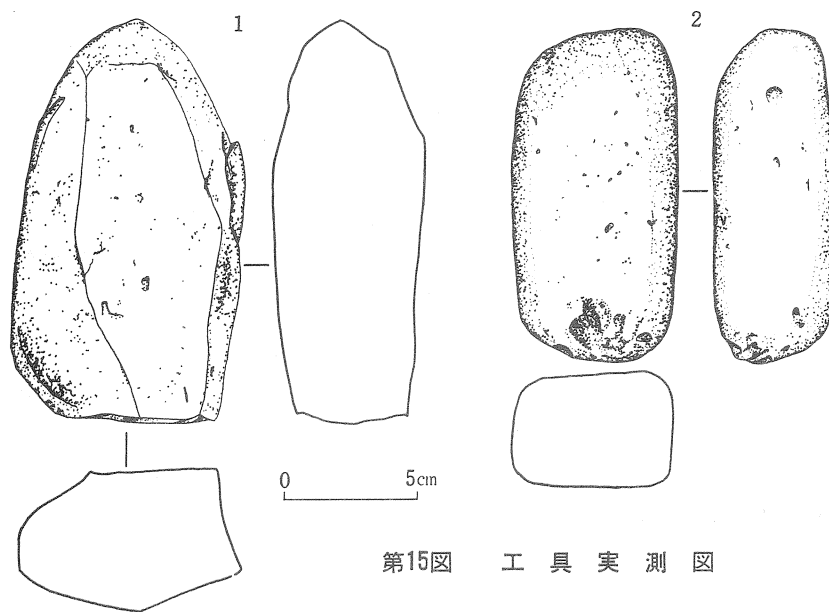
母岩（1—2）〈第14C図〉 地表にわずかに見える程度のものであったが、掘開により明らかに剥離痕のある母岩であることを認めた。現長約2.20m、巾は中央部で約70cm、厚さ約42cm。周辺からは同様に多量の剥片、半製品を検出した。なお（1—2）、（1—3）とも節理の方向は第Ⅰ試掘地下の母岩（1—1）などと同一である。

母岩（1—3）〈第14B図〉 一部露出していたので転石ではないかと考えていたが、調査の結果は根をもつ母岩であることがわかった。掘開した段階での数値は長さ2.35m、巾1.65m、厚さ約1mである。節理に沿って無数の剥離痕が明瞭に認められ、周辺には多量の剥片、半製品が散布していた。

第2母岩 今次の調査で新たに発見したもので、第1号墳の北斜面のちょうどステップになっている部分に、第1母岩群とは逆の傾斜で存在する。古墳築造の際にはおそらくこのあたりから上に盛土をしたものであろう。第2母岩（第14A図）は二子山の母岩のうちで今のところもっとも巨大なものといえる。現長約4m、最大巾3.20m、厚さ約1.60mである。しかし完全に掘開することは不可能で、長さ、巾ともにどれ位の大きさのものかわからない。なお厚さも復原してみると少なくとも3.5mを越すものである。

母岩のいたるところに剥離痕、打撃を加えた痕跡が残り、母岩の前に立てばまさに縄文人の作業の状況を想像するにあまりあるほどの母岩といえる。

母岩の周辺からはリソグ箱29個分の剥片が検出され、第2次調査時の杉村氏報告文を裏



第15図 工具実測図

付ける石器の加工工程を示す好資料が得られた。また打製石器の数も多かったが、その中で十字形石器の破損品を一点検出したことは注目すべきであろう（第10図・6）。なお今後の調査によって第1母岩群や第2母岩の掘開中に石器加工用の工具ではないかと推測される遺物を検出した（第15図1、2）。石質は二子山系の石材をそのまま使用したもの（同1）と砂岩質（同2）があり、片手でつかむことのできるぐらいの大きさ（長さ約15～20cm、巾約10～13cm、厚さ約6～8cm）のもので、一端には打撃を加えたために生じたと思われる痕跡が認められる。今後の課題として注目すべきことであろう。（隈 昭志、松本健郎）

V 土 器（第16図1・2・3）

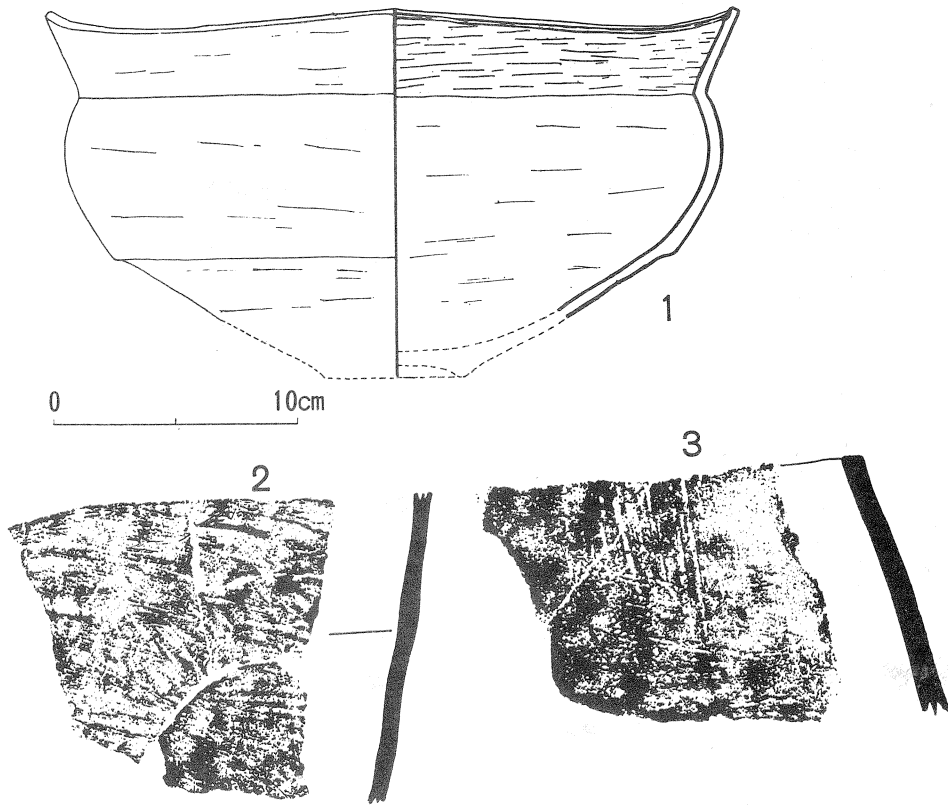
二子山の石器製作址の第1次調査以来、これらの打製石器群の文化時期をいつに比定できるのかがもっとも関心のあるところであった。しかしそのもっとも有力な手がかりとなる土器が検出できず、半ばあきらめた状態であった。ところが第1号墳の内部主体をつかむために設定した第Ⅶ試掘地から土器の検出をみることができた。

まず出土の状態から述べると、層序は第17図に示すとおりである。表土下2.08mの褐色土までは古墳築造時の盛土であり、黒色層にほとんど石材を含まないけれども他の層には多量の石材を包含している。また地表下約10～30cmの深さで、墳頂部の祭神に係るとみられる数点の糸切底の皿を検出した。

（註1）

註1 この二子山は、字「天^{テンジンメン}神免」といい、ここから西方約300mのところに矢具神社の社殿があり、その火たき神事が以前に二子山で行なわれていたという伝承がある。第1号墳上には菅原天神が祀られており、近年まで矢具神社から年に1回だけ御輿の御幸があった。

第16図 土器実測図及び拓影

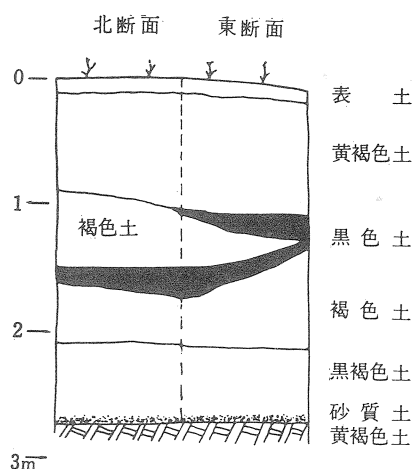


地表下2.08m以下が石器製作址当時の地層と推定できる。やや黒味をおびた褐色土で多量の石材、石器半製品を包含し、その層の下部（地表下約2.60～2.70m）には砂質の土層が認められるが、その砂質土の部分に、まとまった状態で土器を検出した。その層以下は粘質の黄褐色土層で文化遺物はまったく認められない。

検出した土器には2種ある。1つは底部を欠損してはいるが、ほとんど復原できた（第16図・1 高木正文実測）。口縁部は5つの波状を呈し、頸部が「く字」に折れ、それより下の胴部は内彎する。胴部の下部でやや外反するアクセントを認める。外面は粗く磨研されてわずかに条痕を認める。内面は口縁内部の上端近くに1条の沈線を施し、外面より条痕がいちじるしい。器面は内外ともに黒味の強い茶褐色を呈している。土器の大きさは口縁部の直径28.6cm、現存高13.5cm（復原値は16cm前後になるであろう）である。底部の形状は不明であるが、おそらく平底に近いややあげ底を呈するのではあるまいか。

他の1種は粗製の土器片である。破片のみで復原はできないが、いずれも深鉢型の土器の部分であろうと考える（第16図2・3）。1つは口縁部で肩部が広がるもので、胎土が

さてこの種の土器の形式をどこに求めるかが大きな問題である。周辺の遺跡から同じ器形の土器が出土していないかどうか類例をさがしたが、この種の土器はみあたらない。口縁部の波状や肩部の張りは御領式に近く、胴部下のアクセントは三万田式に近い。全体的にも三万田式と御領式との中間的な鉢型土器といえる。また間接的な資料としては第2母岩の排土中に十字形石器(第10図6)を検出したが、この種の石器も三万田一御領の共伴遺物と考えられることなどから、土器の形式を三万田式一御領式の時期に比定して大過な



VI 二子山石器製作址の需給圏（第21図・巻末袋）

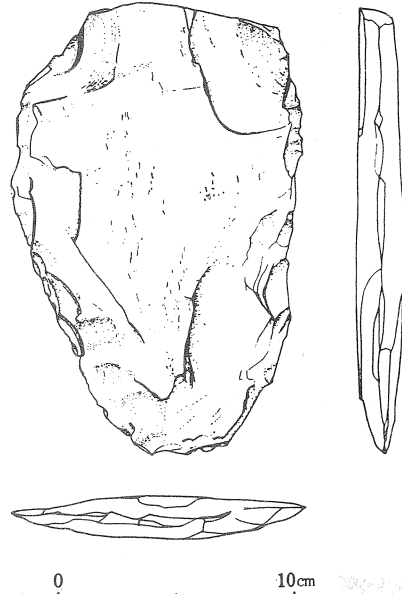
二子山石器製作址では母岩から石材を剥離して、半製品または製品を製作している。このことは第2次調査の杉村報告で確認され、今次の調査でも第20図に示すとおりである。二子山ではたして第Ⅳ工程まで加工したのかどうかははっきりしないが、第2表に示したとおり、第Ⅳ工程の数は少ない。このことは一応完成した製品は持ち去ったことであろうし、第Ⅲ工程か第Ⅳ工程の段階で各居住地へ持ち帰ったと予測される。例えば菊池郡泗水町南田島宇天神平出土の石器（第18図）は使用痕の認められない第Ⅲ工程～第Ⅳ工程の石器で、居住地において最後の仕上げを行なったものと推測してよからう。また菊池郡西合志町野々島宇野田原B遺跡（第21図10）では完成した石器はもちろん、多量の石材片を検出しており、最後の工程を居住地で行なっている例といえる。

	第Ⅰ 試掘地	第Ⅴ 試掘坑	第2母岩
第Ⅰ工程	86	44	186
Ⅱ	38	48	149
Ⅲ	1	13	62
Ⅳ	0	1	10
工 具	5	3	25

	第 I 掘地試	第 V 坑掘試	第 2 母岩
第 I 工程	86	44	186
II	38	48	149
III	1	13	62
IV	0	1	10
工 具	5	3	25

さて二子山で作られた石器または石材がどの範囲まで分布しているかということは需給圏を把握するうえで非常に興味のあることである。肉眼鑑定によって二子山系の石器であると認められた遺跡の分布は第21図に示すとおりである。これによると西合志町周辺の縄

文後期・晩期の遺跡は前述の野田原B遺跡はもちろんのこと、永田・巡畑・花園・中尾原・笹山など多量の石器、石片を出土している。その他二子山石器製作址を中心に周辺の分布範囲を追跡してみよう。西は鹿本郡植木町亀甲西から飽託郡北部町四方寄を結ぶ、ほぼ国道3号線が限界で、東は鞍岳山麓の菊池市毛足^{モウタリ}・菊池郡旭志村岩の本・同湯舟、大津町馬糞塚を結ぶ線で、その中には御領一黒川式の遺跡で有名なワクド石遺跡が含まれている。また遠く菊池川上流の菊池市伊野遺跡は二子山から直線距離にして約20km、分布範囲では現在最も遠い遺跡である。一方北限は菊池郡七城町一本松から先述の毛足を結ぶ線つまり菊池川水系を界として、それ以北には現在のところ確認されていない。南は熊本市緑が丘・弓削宮ノ原で限られ、阿蘇郡西原村には数多くの縄文後・晩期の遺跡が存在するにもかかわらず、1片の二子山系石器も検出されておらず、おそらく白川水系をもって南限としていると考えられる。結局分布範囲はほぼ菊池郡泗水町三万田東原を中心に、南北、東西とも約15~16kmの範囲といえる。二子山からの距離としては前述の伊野遺跡の約20kmを最長とし、それ以内の距離で、遠くでも約15km以内といえる。したがって各居住地から二子山へ往復しようと思えば充分可能な距離であり、日帰行程としても大して無理のない距離といえる。(第20図中●印は二子山石器製作址)



第18図 二子山系石器実測図
(天神平出土)

ただ残念ながら発掘による資料が少なく表面採集によるものが多いこと、筆者らの肉眼による二子山系石器であるという同定の点が弱点である。将来、個々の遺跡を充分調査して、その性格を把握するとともに、ぜひともプレパレートを作って、鉱物学的な鑑定を行ない、よりの確な需給圏を復原して、原始共同体の解明をすることが必要である。

(隈 昭志・平岡勝昭・井上兼利)

Ⅷ 二子山古墳

二子山の山頂には第3次調査の項でとりあげたとおり、2基の円墳がある。その内部主体をつかむこととあわせて、二子山の石材を古墳の石材として使用しているかどうかを確認するため、1、2号墳とも試掘坑を入れた。以下簡単にその結果を述べてみよう。

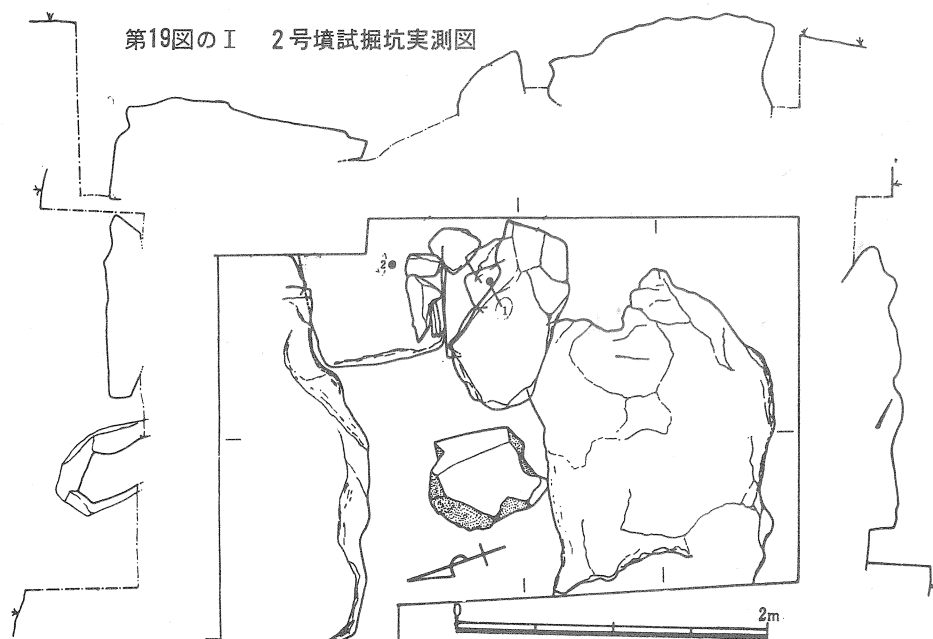
1号墳 第Ⅶ試掘坑によって幸いにも内部主体を確認することができた。墳頂のほぼ中

央部で、墳頂より約 $1.70m$ の深さで家形石棺の屋根に達した。内部主体の確認だけで完掘しなかったため詳細は分らない。石棺は主軸を東西にとり、屋根の巾が約 $1.45m$ 、屋根のすき間からの観察では、内部には土砂が流入しておらず、朱ぬり、人骨の存在を確認した。石材は阿蘇泥溶岩を使用しており、堂々たる石棺で、盗掘を受けていないようである。

2号墳（第19図） 二子山の頂点をなす2基の円墳中、東に位置するのが2号墳である。1号墳と約 $35m$ の距離をおき、比高差は1号墳より $-2.2m$ である。1号墳と同様、山頂を利用して築成されているため、墳裾部の確認ははなはだ困難をきわめるが、直経約 $20m$ 程度であろう。前述の如く、墳裾部が山の斜面と一体となっているため、外観は壮大である。1号墳と比べるとやや小規模である。

今次の調査では、内部構造の確認、および墳丘築成の構造的観察を目的として、墳頂部よりやや南に露出している安山岩の平石を中心として掘開を進めた。

これによって、石室の羨道天井部にあたると思われる巨大な安山岩2枚が、長軸をほぼ東西に向けており、その両巨石の中間、東側下部に石積がみられる。後者はおそらく石室羨道の壁の上部に相当するものと考えられる。これらの石材はすべて、石器製作に用いられているのと同じ金峰山系玄武岩質安山岩である。両巨石の中間位には、天井石となるようなものが1枚欠けているが、後世取除かれたものであろう。その位置には、砂岩質の岩石が突きささった状態で存在する。一部には自然面を残し、一部には剥離した状態を示す粗な面を有している。羨道内に堆積している土中にあり、取除かれた天井石の位置にあ



るものであるから、古墳との直接的な関係はうすいが、当二子山に産し、石器製造に用いられている金峰山系玄武岩質安山岩とは異った石材、砂岩の供給地をどこに求めたのか、石器製作の問題として考えなければならないことである。

天井部に相当する一部分を掘開したのみであるので、遺物等不明であるが、東側羨道壁上部と考え

られる石積の直上より銅銭2枚を得た。第19図中1は「祥符元宝」とあり、北宋銭で1008年より鑄造されている。他の一方は腐蝕がはげしく判読できない。天井石が取除かれていることとあわせて、後世の広義の信仰を示すものといえよう。

墳丘の築成の状態については、明確な所見を得ることができなかった。

2号墳南転石(第19図のⅡ) 2号墳の南側斜面に、長径1.5m、短径1.06mの玄武岩質安山岩の転石が、西の支石状の石に架するような状態で認められ、第1次調査の時より支石墓の疑いがもたれていた。その確認のため掘りおこし、下部構造の有無を観察した。その結果、下部には何ら遺構は認められず、転石直下より須恵器細片1点を検出した。須恵器は細片で、器形・年代を明らかにし得ないが、おそらく2号墳に関係あるものであろう。

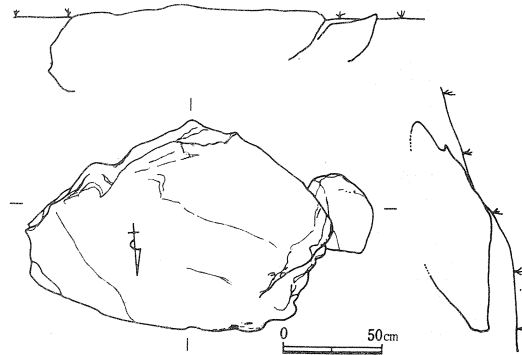
(隈 昭志・松本健郎)

Ⅷ 結 語

昭和41年以來の4次にわたる調査によって二子山石器製作址の概要をほぼつかむことができた。以下にその成果を簡単にまとめてみよう。

1. 二子山丘陵の全域に石材の分布がみられる(第3次までの段階ではごく限られた範囲と推定していた)。
2. 新たに母岩を発見した結果、第1母岩群と第2母岩(ともに玄武岩質安山岩)が遺跡の中心として重要となり、石片の分布もその周辺がとくに多い。おそらく母岩は二子山全域にわたって基盤岩を形成しているものと考えられる。
3. 加工用の工具とみられる石器を検出したうえ、その工作台とみられる砂岩質の台石(第19図1、約50×55cm)を第2号墳の排土中に検出した。
4. 包含層中より鉢形土器を検出したことによって、三万田式一御領式の時期の石器製作址の可能性を濃厚にした。

第19図のⅡ 2号墳南転石実測図



5. 二子山系石器の分布範囲は二子山を中心にして菊池川と白川水系にはさまれた、比較的近距离の日帰りできる程度の需給圏であることが予想される。

6. 丘陵上に存在する二基の円墳は石器製作址の一部を削り取って盛土としたもので、1号墳の内部主体が家型石棺、2号墳が横穴式石室墳？と確認できた。

以上のとおり、二子山石器製作址はきわめて重要な遺跡である。産業開発の進展によって各地の遺跡が破壊されている現在、この二子山も例外ではない。われわれはこの二子山石器製作址を保存して永久に残したいものである。（隈 昭志・三島 格）

注 調査の成果について、1971. 2月の肥後考古学会第142例会で報告した、

IX 遺跡の保存

本遺跡の第3次調査までの経過については、第1章、調査の経過の項で述べたとおりである。

本遺跡は、町役場、町農協、中央小学校及び、集落（西合志町大字野々島字中尾、湯之端東、外園等）に近く、産業、住宅等による開発の立地条件に適しているといえる。昭和41年に開発計画が出されたが、町教育委員会の説得によりこの計画は立ち消えとなった。

その後、昭和44年9月、土地所有者の一部より、開発計画（養鶏団地造成）が出され、①開発計画を許可して欲しい、②許可してもらえねば買い取って欲しいと、強力な申出があった。町教育委員会は、土地所有者の財産権と遺跡の保存という背反する問題をどうするかを決定を迫られた。そこで直ちに県および国に対してその状況を報告するとともに指導を求めた。

同年11月23日、九州縦貫道布設に伴う横山古墳の保存問題を視察するために来県された横山浩一氏（当時文化庁調査官）が来町、本遺跡を踏査され、ご指導をいただいた。

その結果、「現状のままで保存には限界があり、早急に国指定して保護する必要がある。それには、国指定に必要な指定資料を早急にととのえる必要がある」との結論に達した。その結果、国庫補助をうけて、第4次調査を実施したものである。

この遺跡が集落に隣接し、交通の便も良好で、また開発が激しいという条件の中で、今日まで完全な形で保存されてきたことは誠に不思議といえよう。また、山間でなく、平野の中心部にこの遺跡が存在することはきわめてめずらしいことで、それは、文化財の公開利用の面からも絶好の条件をそなえているといえよう。

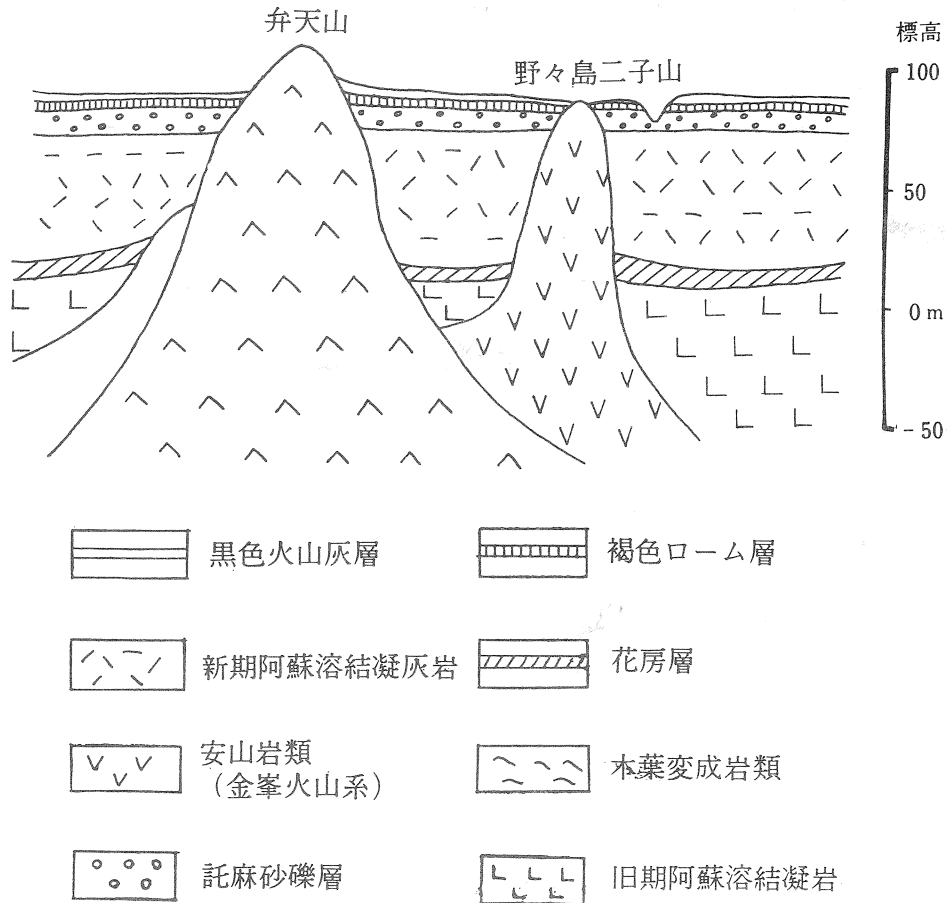
本町では、昨年、長期計画策定に当たってこの遺跡の重要性にかんがみて、国指定をうけ遺跡全面積2ヘクタールを買い上げ史蹟公園として開発し、保存する計画を策定した。

しかしながら、調査が進められ、国指定への運動が進められている中でも、昨年夏、線香工場進出の計画が出されるなど、開発の手は次々に迫っている。早急な指定こそ、この遺跡を守る道であると考えられる。（井上兼利）

第 4 章 二子山遺跡の地形・地質

I、地 形

西合志町野々島二子山一帯は、地形的には通称「菊池台地」とよばれている標高70～80mの比較的平坦な台地である。この菊池台地は、阿蘇火山の噴出物である火山碎屑岩類とそれを切って形成した河岸段丘堆積物によって形成されたもので、大きく3つの地形面にわけられる。高位のものから順に菊池面・託麻面・保田窪面とよばれており（宮本ら、1962）、このうち、野々島二子山一帯は託麻面に属する。また、周辺には、基盤岩類によって形成された残丘状地形が弁天山をはじめとし、点々と台地上に突出した形で分布している。また、植木町・北部町・西合志町一帯の地下には、点々と金峯山火山をはじめとす



第 22 図 地 形 断 面 図

る古い火山の噴出物である溶岩や火山碎屑岩類が埋没地形状に分布していることが最近知られてきた（古川・1965、1967）。

二子山遺跡一帯は、地形的にみると少くとも託麻面に属するが、その付近は、安山岩溶岩によって構成されているので、この火山岩類の侵蝕面的性格をもっており、このような地形になったのは、託麻面の形成時期ということができる。このような地形的特徴は、北部町山室・植木町七本・中久保などの金峯火山山系に近い周辺部では点々とみられるが、二子山のような菊池台地の中央に近いところでこのような侵蝕面が分布するのはきわめてまれである。このような石材が豊富に得られるような地点を古代人が発見し、使用したということは、逆に遺跡によって、西合志地方の地形・地質発達史をとくカギを与えてくれたといえよう。

II 地 質

西合志地方の地質層序は、下位より、木葉変成岩類・古期安山岩類（金峯火山系）・旧期阿蘇溶結凝灰岩類・花房層・新期阿蘇溶結凝灰岩類・託麻砂礫層・褐色ローム層・黒色火山灰層の順で分布している。

菊池台地全体は、約3.3万年前の阿蘇火山の活動によって噴出した新期阿蘇溶結凝灰岩によって形成され、そのもっとも厚いところは、層厚100m以上にも達している。野々島は、この新期阿蘇溶結凝灰岩を侵蝕して形成された旧白川・合志川の河岸段丘の一部であり、その段丘形成直後に褐色ローム層によっておおわれた。このローム層は、約2万年前のものである。この野々島二子山一帯がほぼ現在の地形になったのは、約2万年前のことである。このことは、遺跡としても、2万年より古い遺跡は理論的に存在の可能性はないことを示している。その後、現在までに何回かの黒色火山灰層が降灰し、現在に至っている。

二子山遺跡地点は、かつては、現在の竜田山、弁天山のような丘陵、台地を形成していたのが3.3万年以降に侵蝕され、2万年前に完全に平坦化されたものである。構成地質は、節理のよく発達した暗灰色～黒灰色安山岩溶岩で、この安山岩溶岩が石器の材料としても使用されている。

この安山岩溶岩は、かんらん石をわずかに含んだ玄武岩質安山岩〔九大・理・地質・種子田教授（火山学専攻）鑑定〕であり、前述の植木町・北部町に分布するものと同質のもので、金峯山火山系の火山活動によって噴出した溶岩である。

（東海農政局計画部 古川博恭）

調 査 関 係 者

調 査 員

坂本経堯 乙益重隆 三島 格 古川博恭 隈 昭志 杉村彰一 上野辰男
平岡勝昭 緒方 勉 桑原憲彰 富田紘一 西健一郎 松本健郎 赤瀬 恵

協 力 者

田辺哲夫 原口長之 東 光彦 杉本武彦 伊藤奎二 佐藤伸二 横田 浩
河村 修 岩井瑞恵 谷良太郎 前川英利 井上 啓 丸山武水 原口健二
高木正文 中村幸史郎 牧野吉秀 江本 直 坂本正幸 杉本長広
田中光男 姫井正信 大木清昭 立山英輝 谷川俊郎 東 貴福 東 隆一
福島精士 野津隆文 井上時男 野中周一 松本誠剛 益田恵子 江良昇子
友枝さよ子 菊原昌子 原久美 小山公子 大木清美 猿渡好夫 宮木直継
猿渡国春 西山一洋 田添 充 古閑健一 倉原謙治 田中茂男 広瀬明子
春田純一 梅原美代子 原紀代子 佐藤洋子 高木京子 阿蘇品和代
福島尚美 松岡菊世 立山和俊 今村辰代 村上輝子 小原由昭 角田久美子
永田秀美 加藤清範 坂田えみ子 竹本由美子 森田周子 原口かつみ
古城 忍 坂本重義 岩田裕 大賀健二郎 福永幸博 坂田明彦 上野康行
嬉野修一 富田みえ子 中島康恵 大淵時子 立山秀樹 小田るみ子
小林正子 吉岡誠子 黒川 聡 中村咲子 大林洋子 曾我厚子 杉山哲恵
島田隆久 平本朋子 黒田千賀子 佐藤智 東 幸雄 松本祐一 角田 博
福島節代 船津利智子 吉川洋子 鶴島俊彦 木村仁子 村上よしみ
坂田光晴 丸山英二 松村克徳 坂本桂子 森山英治 竹熊敏子 脇山公友
樋口純子 大岩清賢 山本憲一 角田隆夫 田中重吉 松本 彰 月足信英
一法師頼雄 竹下淳一 松本義臣 川崎さえ子 立山正代 永田より子
永田富也 園木章義 稲田繁雄 岩崎 満 本田徳子 矢野君子 主計順一
大島知博 野中帝二 垣田知治 田中朝臣 野中公四郎 竹下至誠
安武民憲 平田祐子 高田早苗
九州大学（鏡山猛・岡崎敬・種子田教授）熊本商科大学 別府大学（賀川光夫
教授）熊本博物館 旧山鹿高等学校 鹿本高等学校 鹿本商工高等学校

地元協力者

松田寛次郎 松田伊津子 松田一義

町文化財専門委員会委員

工藤誠一 田中友喜 緒方 勲 大藪泰寛 上村清定

西合志町役場

広綱 護 上野 堅 平田案山子 陣上 薔 平山勝利 建岡行治 松永定

西合志中央小学校

田中五美 大森ケイコ 林 好子 高峯ミサオ 木村悦子

西合志町教育委員会

松田道成 緒方 矢 工藤千秋 緒方清人 長田一利 井上兼利 九重 幸
松岡 隆 福田照代